

闇が去って、すでにまことの光が輝いている。(ヨハネ第一の手紙2の8)

The darkness is passing and the true light is already shining.

この短い言葉から、キリスト教信仰の本質が浮かびあがってくる。闇は過ぎ去っていきつつある。闇の力の末路がはっきりと見えるというのである。このようなことは、学問や科学技術、あるいはさまざまな人間の考え、思想といったことでは決して分からない。このような確信は生まれえない。この世の学問をいかにきわめても、悪の力が最終的にどうなるのか、といった問題はまったく分からない。私たちが、いくら本を読んでも学び考えても、むしろ漠然とした不安や悪の力への恐れが増大していくことになりかねない。それは人間が最終的にはだんだん衰えて死という闇の力に呑み込まれていく、ということともつながっている。

そのような中で、聖書は明確に悪の力、死の力の末路を示している。現在、私たちのまわりには、そしてはるかな昔から悪の力はいたるところで支配していると見える。そしてそれが弱まっているなどという気配も感じられない。

そのようなただ中であって、神はその御心になつた人を呼び出し、その真理を告げてこられた。悪はいかにはびこっているように見えても、すでにそれは滅びへと向っているということである。そしてとくに聖なる霊を深く受けた者にとっては、すでにその滅びは確実な真理として示されていた。

聖書の巻頭の本、創世記においてすでにこのことは最も重要な真理ゆえに、最初に記されている。

闇と混沌がたちこめるただなかに、神は「光あれ！」と言われた。するとただちに光が存在した。(創世記1の1-3参照) これはまさに神のひと言で、その光で、闇は退く一滅びるのだという宣言にほかならない。

主イエスが誕生したとき、そのイエスを殺そうとした闇の力があつた。しかし、イエスという光はその闇に勝利して、この世に福音を伝え、闇にある人たちを救いだされた。そしてその生涯の終りにも闇の力がイエスを十字架にかけてしまった。しかし、そのような悪の力すべてに勝利して復活し、聖なる霊となって、弟子たちに新たな力を与え、キリスト教の伝道がはじまっていった。

そして、聖書の最後の書である黙示録にも、いかに悪の力が強く見えて地上を支配しているようであっても、最終的には神の力によって滅ぼされるということがメインテーマとして語られている。

私たちに本当に必要なのは、複雑な論文や研究、あるいはさまざまな知識でなく、上にあげたような単純にして明解な神の言葉なのであり、それを幼な子のような心で信じることである。



秋の野草の花といえば、まずリンドウが私には思いだされます。その深い青紫色は多くの人々の心にも射し込み、そこに余韻を残す色調だと思われるのです。

山中で思いがけず見いだしたときには、それは天の青を落としたような色、御国の雰囲気であらわすような色調として感じたものです。これは私たちを、みもとへと呼ぶ天来のメッセージをたたえたものです。

私が大学2年の秋に、京都洛北の鞍馬山から登りはじめ、そこから広大な、京都北山、丹波高原の山々を北へ北へと地図と磁石を頼りに、一週間近くをかけてついに由良川源流地域に達し、そこから福井県の小浜市にまで行ったことがあります。それはすべてテントを使っての山中の野宿で、山岳地図ではすでに廃道とされている道もあり、ときには道に迷い、かなり困難な山歩きでした。その源流地域の全くといってよいほど人が入らない地域で見たリンドウは、それまでの長い山行の後だけに今なお忘れられない印象を残しています。

このミヤマリンドウは、北海道の大雪山系の最高峰である旭岳を望む草原で咲いていたものです。リンドウの種類は、20種類ほどもあり、春に咲くハルリンドウやフデリンドウもありますが、ほかの多くのリンドウは高山では夏、低山や平地に近いところでは秋に咲くものです。右下に添えた写真はどのようなところで咲いていたかを示すためのものです。 (文・写真ともT. YOSHIMURA)

